作曲家、ピアニスト 加古（かこ） 隆（たかし）さん

壁をつくらず生きる ①

人間発見

1995年から続くNHKのドキュメンタリー番組「映像の世紀」シリーズは、激しくも悲しいオープニングのテーマ曲が印象的だ。この「パリは燃えているか」を作曲したのが加古隆さん（76）。クラシックも現代音楽もジャズも、様々な音楽を学んで独自の音楽世界を築き上げた。

この曲に着手したのは94年の秋です。毎日朝から夜まで、思いついたメロディーなどをメモしていました。今も流れているテーマ曲は、比較的早い時期に思いついて「これはいいな」と予感していましたが、最終的に決めたのは、オープニングの映像を見せてもらったときです。

当時としては珍しいCGを使った映像で、20世紀の著名人の映像や名前、キーワードが現れては消える、そんなオープニングです。この映像にリズムを感じ「これはいい」と思っていたメロディーをそのテンポに合わせました。

「パリは燃えているか」は第2次世界大戦末期、ナチス・ドイツ占領下のパリが解放されるときにヒトラーが発したとされる言葉です。同じタイトルの映画もあります。

「映像の世紀」テーマ作曲 ■ 小2で「運命」と出合い

私にとっては、人間の二面性を表す言葉でもあります。20世紀の人類は戦争という破壊行為を繰り返してきた。一方で、私が青春時代を過ごしたパリには、人類の英知を集めた美しいものがたくさんあります。これらを生み出したのも人間です。こうした人類の二面性を、曲のタイトルに込めました。

初回放送から、テーマ曲に大きな反響があった。

音楽に対する問い合わせが第1話から大変多かったと聞きました。この曲によって、加古隆という名前を知った方も多いでしょう。でも私は、番組そのものに感動していました。20世紀を映像で振り返るという番組のコンセプトだけでも興味深かったし、これらの映像と私の音楽がぶつかり合って、ともに感動を高め合っているように感じられたのです。

「伴奏」のように、音楽が映像の添え物になっているのではなく、同等の立場で相乗効果を生んでいた。そういう意味で、新しい芸術の形なのではないかと思ったし、その後も何曲も作ることになった、この番組の音楽づくりへの意欲もわきました。

今年、デビュー50周年を迎えた。幼いころは、今のような作曲家になるとは夢にも思わなかった。

1947年に大阪府で生まれました。第2次大戦は終わっていましたが、まだ皆が貧しかったし、私の家には楽器も蓄音機もなく、両親も音楽とは関係ない仕事をしていました。近所に一軒だけ、蓄音機と、たった一枚のレコードを持つ家がありました。トスカニーニ指揮、NBC交響楽団によるベートーベンの交響曲第5番「運命」です。

小学2年のときにこれを聴いて、夢中になってしまって、しょっちゅう聴きに行きました。家に泊まって、枕元に蓄音機を置いてもらって、レコードを聴きながら眠ったこともあります。

今と違って、レコードがとても高価でした。だから、小学生のころから大人になるまで、私はようやく入手した大好きなレコードを、何百回も聴きました。

それがよかったと、今は思っています。好きな交響曲の、たくさんの楽器の一つ一つの音、容易に聞き取れない内声まで、すべて記憶に刻み込まれました。

楽譜を見たことがなくても、音楽の構造を自分なりに理解できたのではないかとも思います。当時から今まで、自分が好きになれるものは、クラシックでもジャズでも現代音楽でも、壁をつくらず何でも吸収してきました。

（編集委員　瀬崎久見子が担当します）

略歴　1947年大阪府生まれ。東京芸大大学院修了、パリ国立高等音楽院卒業。73年にフリー・ジャズのピアニストとしてデビュー。映像や舞台音楽など幅広く作曲。アルバムに「ポエジー」「KLEE～いにしえの響き」など。

作曲家、ピアニスト 加古（かこ） 隆（たかし）さん

壁をつくらず生きる ②

人間発見

ピアノを習い始めたのは、小学校時代の教師に勧められたからだ。

小学2年のときです。担任が女性の音楽の先生で、シロフォン（木琴）やタンバリン、オルガンなどを使ってよく子供たちに合奏をさせていました。すると私が上手だったらしく「この子にピアノを習わせてはどうか。私が手ほどきするから」と両親に勧めてくれたのです。

私は男ばかり4人兄弟の長男です。当時、1950年代は「長男は家業を継ぐべきだ」「ピアノは女が弾くもの」などと考える大人も多かった。けれども私の両親は、おおらかというか、私と同様、何でも受け入れる、壁をつくらない人で、喜んで私にピアノを習わせてくれました。

とはいえ、ピアノの練習ばかりしていたわけではありません。スポーツも好きで、中学時代は柔道にも夢中でした。身長が170㌢近くあって、強かったんですよ。当時は大阪府豊中市に住んでいて、近所の道場に夜までいて、黒帯の大人を相手にけいこしていました。

ピアノの方は、手ほどきをしてくれた女性の先生から何人かあとの、京都大学で哲学も学んだ男性に習っていました。指のケガの危険もある柔道をやっている私を温かく見守ってくださった方です。その先生が、中学3年になった私におっしゃったのです。「私はピアニストとして生きてきたが、作品は何も残せなかった。だから、あなたは作曲家になってはどうか」

そう言われて、その気になりました。確かに、幼い頃からベートーベンやシューベルトといった作曲家に憧れていました。子供向けの伝記の本を読んで、クラシック音楽の作曲家のドラマチックな人生を知っていたからです。

ピアノと柔道に熱中 ■ ストラヴィンスキーに衝撃

ほかに、中学時代に好きになった作曲家は、ストラヴィンスキーだ。

ピアノを習い始めたころ

中学時代は、お小遣いはすべてレコード、誕生日のお祝いもレコードでした。近所に一軒あったレコード店に通っては、店主にお薦めを教えてもらっていました。

ある日、ストラヴィンスキーの「火の鳥」「ペトルーシュカ」「春の祭典」の3枚が入荷していました。店主は「すごく話題になっている」と言うし、レコードジャケットも格好良かったので「火の鳥」を買いました。

帰宅し、ステレオにレコード盤をのせ、A面を聴き終わると、あまりの衝撃に、母に2カ月分の小遣いの前借りを頼んで、ほかの2枚のレコードを買いに走りました。

いわゆるクラシック音楽ではありますが、ドイツやウィーンではなく20世紀はじめのロシア出身の作曲家であるストラヴィンスキーの音楽は、神秘的で、原始的な力に満ちていて、宇宙を感じました。「ズン、ズン」と脈打つような激しいリズムを刻む部分もあります。

こういう音楽を、私は真っ暗な部屋に一人籠もって大音量で聴きました。兄弟を追い出して、ドアの鍵も、窓のカーテンも閉めて、何時間も聴くのです。家族にも近所にも迷惑だったでしょう。でも、私はここぞというときに、極端なほどの集中力を発揮してのめり込むタイプです。

高校生になると、ジャズに出合う。

将来は作曲家、大学は東京芸術大学と決めて、高校までは普通校できちんと勉強しました。大阪府立豊中高校です。大阪大学や京都大学を目指す同級生が多かったですが、1学年上にジャズが好きな先輩がいて、ライブに誘われました。アート・ブレイキー&ザ・ジャズ・メッセンジャーズです。会場は大阪のフェスティバルホールでした。

司会者が彼らを紹介し、緞帳（どんちょう）が上がる途中で早くも演奏が始まったのですが、最初の1音から身体がしびれました。音楽が、矢印のついたスクリューになって、かなり上の方の席にいる私の所まで飛んできたように感じたのです。その日から、ジャズのレコードにも夢中になりました。

（編集委員　瀬崎久見子）

作曲家、ピアニスト 加古（かこ） 隆（たかし）さん

壁をつくらず生きる ③

人間発見

大学受験を前に、結核にかかった。

高校生になると、東京芸術大学作曲科の受験を目指して池内友次郎門下の先生に習い始めました。ハーモニーや対位法、フーガなどの作曲技法や音楽理論を学ぶのです。

池内先生は俳人、高浜虚子の次男で、フランスの作曲技法を日本に伝えたといわれる方です。東京在住の池内先生が関西にいらっしゃるときには、直接教わりました。

ところが高校3年になって肺結核にかかり、4月から8月末くらいまで入院しました。退院しても、医師の指示は「栄養を取って、無理をしないで」だったので、その言葉通りのんびりと楽しく過ごしました。大学には1年浪人して入ればいいと思って、好きな小説を読んだり音楽を聴いたりしていました。

けれど元気になったころ、池内先生が「どんな試験なのか、経験しておくために受験してはどうか」とおっしゃった。年明けの1月から1カ月間、猛勉強しました。

私はここぞというときに集中力を発揮するタイプで、その力が出たようです。東京芸

東京芸大作曲科に入学 ■ パリで世界的作曲家に師事

大作曲科に合格しました。1965年のことです。

東京芸大では、主に作曲家の三善晃に師事した。

東大仏文科とパリ国立高等音楽院で学んだ方です。20世紀の新しい音楽、現代音楽の最先端をフランスで吸収した、当時売れっ子の現役作曲家でした。

始発の電車に乗って、杉並区の三善先生のお宅に伺いました。先生は朝の3時や4時に起きて作曲の仕事をし、一段落してから、私たち学生の相手をするのです。

私の楽譜をみて、ここをこう直せ、など具体的な指示をするわけではありません。言葉はなくとも、私の楽譜を見つめる先生の表情を見ているだけで、評価は分かりました。何より、現役作曲家の仕事ぶりを間近で見ることが最高の勉強でした。

大学院までは、当時の前衛的な現代音楽をじっくり学んだ。一方でジャズも変わらず好きだった。

叔父がニューヨークにいて「大学院修了後にこちらに来たら？ クラシックもジャズも勉強できる学校があるよ」と誘ってくれました。魅力的な話に心引かれましたが、池内先生に相談すると「パリへ行きなさい」。フランス政府給費留学生の制度を勧めてくださった。

私が給費留学生になるための後押しもしてくださった先生のお気持ちがありがたく、パリの国立高等音楽院で学ぶことにしました。フランス語を勉強し、さまざまな手続きをこなし、1971年6月にパリに行きました。

メシアン（前列左端）と学生たち。後列左端が加古さん

当時、パリ国立高等音楽院には作曲を教える先生が主に3人いて、その一人がオリヴィエ・メシアンです。作曲家として世界的スターであるだけでなく、教育者としてもブーレーズ、シュトックハウゼンら多くの作曲家を育てた方です。私には難しいと思っていたのですが、他の2人の先生が、ちょうど音楽院を去るタイミングでした。

メシアンのもとに行くしかありません。教務課にメシアンの授業の日や時間を聞いて、教室に向かいました。

ドアをノックすると「ウィ」とメシアンが出てきました。私は彼の顔もよく知りませんから「あなたはメシアンですか？」と聞いてしまった。

再び「ウィ」。そこで、あなたのクラスに入りたい、と申し出ると「君の作品を見せて」。楽譜を渡すと、ざっと眺めて「あなたを受け入れましょう。でも、この音楽院の入学試験を受ける必要がありますよ」。

それは、朝8時から夜11時くらいまで大きな教室でたった一人、課題に沿って作曲をするという大変な試験でした。メシアンは「教室は寒いから毛布と、サンドイッチと、スリッパは持っていきなさい」など親切にアドバイスをくださいました。そのおかげと、持ち前のここぞというときの集中力を再び発揮して、試験をパスしました。

（編集委員　瀬崎久見子）

作曲家、ピアニスト 加古隆（かこたかし）さん

壁をつくらず生きる ④

人間発見

1971年から、音楽教育機関として世界的権威の一つであるパリ国立高等音楽院で学んだ。師は、電子楽器を早くから活用したり、鳥の声をもとに音楽を作ったりと先進的な作曲活動で世界的に著名だったオリヴィエ・メシアンだ。

グランドピアノの前に座るメシアンを、10人くらいで囲む授業をよく覚えています。中でも、彼の作品分析を聞くのが面白かった。

16～17世紀のモンテベルディ、19世紀のワーグナー、20世紀のベルクなど、さまざまな時代の作曲家の音楽を、どんな技法を使ったどんな構造の作品なのか、メシアンは分析してくれました。

自身の代表作「トゥランガリラ交響曲」についても解説してくれるのです。「ここはインドのリズムを使っている」「この部分は、ある数式にのっとって楽譜を書いている」などという具合です。

マリンバ（木琴の一種）を使った四重奏曲を書いてメシアンに見てもらったときのことも思い出深いです。奏者が4本のバチを持って演奏する楽曲だったので、メシアンは

師匠メシアンと深交 ■ フリー・ジャズに没頭

「これは演奏不可能だ」と批判しました。けれども当時、4本でも6本でもバチを持てるマリンバ奏者が既に日本人にいました。フランスより日本が、演奏テクニックで進んでいる部分もあったのです。

私は当時パリにいた、4本のバチを持てる日本のマリンバ奏者を呼んで演奏してみせました。メシアンは、納得しつつも「特別な人でないと演奏できないでしょう」と一言。面白かったです。

前衛的な現代音楽を学ぶ日々だったが、やがて再びジャズの世界へ足を踏み入れた。

盲目の学生がいて、試験のテーマにジョン・コルトレーンを選んでいました。私も大好きなサックスプレーヤーです。「僕もジャズが好きなんだ」と声をかけると、バンドを紹介されて、舞台に出ました。パリに渡って2年後の73年。それが私にとってのデビューです。クラシックや現代音楽ではなく、形式にとらわれない即興演奏として注目されていたフリー・ジャズのピアニストとしてプロになったのです。

欧州各地を巡るツアーが続き、音楽院には足が向かなくなりました。60年代末の学生運動を経て、70年代の欧州では自由な生き方を象徴する音楽としてフリー・ジャズがとても人気でした。

フリー・ジャズのプレーヤーには、楽譜の読めない人もいます。それでも素晴らしい音楽をやるんです。対してパリの音楽院の学生は、複雑な楽譜を初見でスラスラ弾き、難しい音楽理論を語れる、エリートの集団です。

パリを拠点にフリー・ジャズをやっていたころ

私はそのどちらも素晴らしいと思っていたし、壁をつくらず、やりたいことは何でもやろうと思いました。

音楽院を中退しようかと思った。しかしメシアンが試験を準備してくれた。

ある日、メシアンから電報が届きました。「あなたの卒業試験を○月○日にセットしました」

当時の音楽院では、卒業試験のセッティングは学生がするものでした。ジャッジをお願いする先生たちに交渉し試験日を決めるなどの作業を学生自身がやるのです。なのにメシアンは、私のためにそれらを自らやってくれました。

これでは試験をサボるわけにいきません。覚悟を決めて試験会場に向かい、先生たちに自分の作品の楽譜を見せたり、録音したものを聴いていただいたりしました。最後は、私の担当教員であるメシアンと私は教室から出て、結論を待ちました。

そのとき、謝りました。「即興音楽に夢中になって、授業に出なくなってすみません」。メシアンは「即興音楽は大事です」と温かく認めてくれました。「私も週末に教会でオルガンを弾きますが、それも即興です」。それは、フリー・ジャズとは少し違うかもしれないとも思いましたが、ともかく76年夏、パリ国立高等音楽院を卒業しました。

（編集委員　瀬崎久見子）

作曲家、ピアニスト 加古（かこ） 隆（たかし）さん

壁をつくらず生きる ⑤

人間発見

映像と音楽 高度に対峙 ■ 若い世代に刺激を

1976年にパリ国立高等音楽院を卒業後、一度帰国した。既に欧州でアルバムを出していて、日本の音楽ファンには知られる存在だった。

78年には再びパリに戻ってピアノトリオ「TOK（トーク）」を結成し、アルバムは世界で発売されました。ジャズの世界で順調でしたが、79年の冬に、転機となるソロのコンサートがありました。

フランス北部のカーンという都市で、ソロばかり3人の音楽祭に出てくれと言われたのです。英国のピアニストが大雪で来られなくなって、その代わりです。

たった一人、ピアノ1台で聴衆に喜んでもらうには、ジャズだとか現代音楽だとかジャンルにとらわれてはいられません。必死に弾いているうちに、自分の中にあるすべての音楽が出てきて、身体とピアノが、空中に浮かんだような感覚に陥りました。終演後、フランス人ピアニストに「君は将来、有名になるよ」といわれました。

80年に日本に拠点を移し、数年たったある年末、尊敬する音楽評論家の野口久光さんからかかってきた電話が、もう一つの転機になりました。「1曲でいいから、誰でも知っているメロディーを取りあげてみたら？」

イングランド民謡「グリーンスリーブス」をもとにした「ポエジー」を、85年に東京のPARCO西武劇場（現在のPARCO劇場）で発表しました。

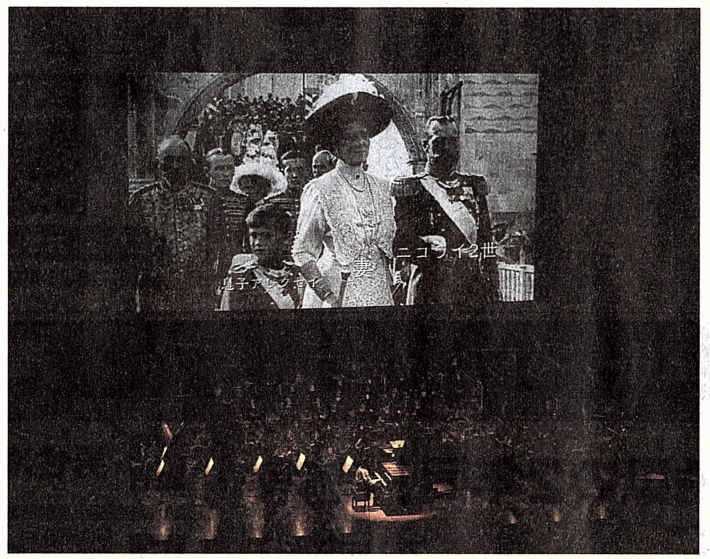
前衛的な演奏をしていたそれまでの私にとって、メロディアスな曲を弾くことは少し勇気のいることでした。でも聴衆は喜んでくれて、自分でも、現代音楽や即興などいくつかに分かれていた加古隆が、ひとつにまとまったように感じました。新しい世界への大きな扉の前に立てたような感覚もあった。

大好きなパウル・クレーの絵画をもとに作曲したアルバム「KLEE」を出したのは、86年だ。

絵画や映像など、視覚から入ってくるイメージから音楽を作る仕事への関心が高まりました。CMや映画音楽、テレビ番組のテーマ曲、舞踏の「山海塾」の舞台音楽などです。ビジュアルを彩る伴奏というより、映像も音楽もともに進化できるような世界を目指したいと思いました。

2016年からは「映像の世紀コンサート」を始めました。NHKの番組の映像をコンサートホールの大スクリーンに映し、ナレーションも入れて、この番組の音楽を私のピアノとオーケストラで演奏します。

それまでなかったコンサートだと思っています。年々、映像と音楽が、高度にかかわりあう公演に成長しているように感じています。



2016年、東京のオーチャードホールでの映像の世紀コンサート＝堀裕二撮影©NHK

デビュー50周年にあたる今年は、コンサートも多く開いている。

今後は11月に埼玉県川口市、12月に神戸市でソロとカルテットの公演があります。50周年記念のアルバムも12月に出す予定です。

今後は、自作を譜面に残す仕事もやっていきたいです。即興を長くやったこともあって、楽譜になっていない作品が少なからずあるのです。自分もそうでしたが、子供のころの出合いが、人生に大きな影響を及ぼします。ですから、私も若い世代にいい刺激を与えられる作品を残したい。

パリ国立高等音楽院での師であるメシアンには「あなたが日本人であることは財産ですよ」と言われました。ほかの文化に壁をつくらない姿勢を貫きつつも、日本人である自分の感性も大切にしていきたいです。

最後にトレードマークの帽子について少し話します。1980年代前半にテレビ番組の仕事でアフリカに行くことになり、プロデューサーに「太陽光が強いので帽子をかぶってください」と言われました。それまで帽子が苦手で、知り合いに相談したら帽子デザイナーを紹介してくれた。それが気に入って、以来、愛用しています。

（編集委員　瀬崎久見子が担当しました）